

大学への帰属意識と大学適応感との関連： 部活動・サークルの所属からの検討

九州大学大学院人間環境学研究院 須 崎 康 臣

九州大学大学院人間環境学研究院 齊 藤 篤 司

九州大学大学院人間環境学研究院 杉 山 佳 生

Relationship between sense of belonging and adjustment to school among university students in clubs/ circles

Yasuo SUSAKI, Atsushi SAITO, Yoshio SUGIYAMA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

キーワード：愛着，居場所，多母集団同時分析

Key Words: affective, comfortable places, multiple-group structural equation modeling analysis

諸 言

大学生は留年，休学，退学といった大学での不適応問題を抱えている（内田，2012）。この問題に起因する要因として，経済，精神障害，身体疾患も挙げられるが，その大半を学業不振や意欲減退といった要因が占めている（内田，2013b）。この問題は，学生だけではなく，大学や入学希望者にとっても重要な課題である。退学による大学生の減少は，授業料収入の減収といった経営面での逼迫をもたらし，学生サービスの面から捉えると，大学も無視できない問題である。なぜなら，このような問題を抱えていることは，入学希望者が大学に持つ印象に対してマイナスとなるためである（内田，2013a）。そのため，大学生が充実した大学生活を送るための支援が重要になる。そして，その支援の一つとして，大学への適応を促すことが重要であると考えられる。大学への適応を捉える概念として，大学適応感が挙げられる。大学適応感とは，大学生が「客観的・主観的に大学生活を肯定的に捉え，大学側からの要請にも適切に対応している状態及びその状態に到る過程」（須崎・杉山，2016）である。

大学適応感に関する研究では，友人や教員といった

対人関係と学業の2つの側面に大別され（広沢，2007），対人関係に着目した研究が多く行われている。中山（2015）は，大学適応を対人適応と学業適応から捉えて，授業で形成されたグループにおける対人関係への動機づけが対人適応を介して，学業適応を促進することを明らかにしている。大隅ほか（2013）は，大学生生活において友人関係を重視する大学生ほど入学直後の大学適応感が高くなる傾向にあることを示している。松井ほか（2010）は，良好な友人関係が大学適応に対して正の影響を及ぼし，消極的な友人関係が大学不適応に正の影響を及ぼすことを報告している。このことから，大学適応感を促すための方策として，対人関係の構築が重要になると考えられる。

対人関係の構築が可能となる場として，部活動・サークルが挙げられる。友人と知り合うきっかけとして，大学生の45.1%が部活動・サークルだったことを挙げている（ベネッセ教育総合研究所，2012）。高木（2006）は，大学生にとって重要な所属組織として部活動は約18%，サークルは約17%であることを示している。大学生の大半は部活動・サークルに所属している（平井ほか，2012；迫・荒井，2002）ことから，部

活動・サークルは大学生活の重要な位置を占めると推察される。

また、部活動・サークルを含めた課外活動は大学生の大学適応感を促す可能性が指摘されている（千島・水野，2015）。Busseri et al (2011) は、大学新入生において、大学内での活動領域の数とその頻度が大学適応に正の関連を示すことを明らかにしている。大学生ではないが、渡辺・大重（2010）は、中学生を対象に顧問のリーダーシップが部活動満足感を介して学校適応に正の規定力を示すことを明らかにしている。松村・日下部（2014）は、中学生を対象に、運動部と文化部における部活動適応感が学校適応感に正の影響を及ぼすことを示している。岡田（2009）は、運動部と文化部で積極的に参加する中学生は無所属の中学生に比べて学校での順応感と享受感が高い傾向にあることを確かめている。したがって、部活動・サークルは、大学生がその活動に対して積極的に取り組むことや、その活動を通して多種多様な人との交流をすることによって、大学適応感を育む要因の1つであることが考えられる。

一方で、大学適応感を促す要因として、個人が大学に対する愛着や一体感といった肯定的な意識が影響していると考えられる。この大学に対する肯定的な意識として大学への帰属意識が考えられる。大学への帰属意識とは、学校環境で他者からの受容や尊敬、一体感、サポートを感じる程度のことである（Strayhorn, 2012）。高木（2006）は「人は、何らかの組織に所属すること、良好な人間関係をもつことによって、精神的な健康を維持し、日々の生活を精力的に、スムーズに行うことができる」と述べている。このように人が組織に帰属したいという欲求は、人が生まれつき持つものであり（Baumeister & Leary, 1995）、大学への帰属意識は大学適応感と関連していることが考えられる。

この点について、高木（2006）は、大学生にとって重要な組織への帰属意識と充実感との関連を検討しており、内在化要素と愛着要素が充実感に対して有意な正の関連があることを報告している。高木（2007）は、大学を重要な組織と捉えている大学生において、充実感に愛着要素が正の影響を及ぼし、孤立感に対して愛着要素と存続的要素が負の影響を示し、自己の存在の肯定に内在化要素と愛着要素が有意な正の規定力を有することが確かめられている。中村・松田（2013）は、大学への帰属意識のうち愛着のみが大学不適応と大学満足に有意な規定力を示し、愛着が媒介変数となり、

大学不適応を抑制することを明らかにしている（中村・松田，2014，2015）。このことから、大学への帰属意識は大学適応感を促す要因であることが考えられる。

さらに、浅井（2011）は、大学生の帰属意識が「集団における人間関係」「集団での目標達成」「自集団の他集団との比較」を通して、集団に肯定的な感情を抱くことによって高まり、部活動・サークルはその集団の一つとして機能していることを報告している。部活動・サークルでは、所属する大学生同士の関係構築があり、競技会、発表会といった部活動・サークルの目的に応じた活動が行われ、その中で他の団体との交流が生じる。このような過程を経ることによって、大学への帰属意識が育まれることが推測される。

これまで大学への帰属意識と大学適応感に関する研究は行われているが、部活動・サークルの所属が大学への帰属意識と大学適応感に関する影響について検討した研究はない。以上のことから、本研究は、部活動・サークルに所属する学生と所属しない学生を対象に大学への帰属意識と大学適応感との関係を明らかにすることを目的とする。

方法

1. 調査・分析対象者および調査手続き

国立大学に所属し、必修科目として開講された体育授業を履修する大学初年次生2046名を対象に調査を行い、データの欠損がない1718名（男性1191名、女性527名；平均18.63±.81歳）を分析対象とした。調査・分析対象者が所属する学部は、文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、芸術工学部、農学部であった。調査票の表紙には、成績と関連しないこと、回答の結果が他者に見られることがないこと、無記名形式での調査であることが明記されており、調査前に調査の趣旨および説明が行われた。なお、調査は、2015年6月に実施された。

2. 調査内容

(1) 部活動・サークルの所属

大学での部活動・サークルの所属の有無について調査を行い、「部活動（公認）の所属」と「サークルの所属」に対して運動系、文化系と無所属から回答を求めた。

(2) 大学への帰属意識

大学への帰属意識を測定するために、中村・松田（2013）が作成した大学への帰属意識尺度を使用した。

この尺度は、「愛着」(8項目)、「内在化」(7項目)、「ブランド」(4項目)、「規範・世間体」(4項目)の下位尺度から構成されている。「愛着」は大学に対する好意、「内在化」は大学に対する一体感、「ブランド」は大学が自分にもたらす恩恵、「規範・世間体」は大学を辞める場合の世間体を気にする項目から構成されている。回答形式は、1(まったくあてはまらない)から6(よくあてはまる)までの6件法である。本尺度は、中村・松田(2013)によって妥当性が確認されている。分析には、各下位尺度で算出した合計得点を用いた。

(3) 大学適応感

大学適応感を測定するために、大久保(2005)が作成した青年用適応感尺度を使用した。この尺度は、「居心地の良さの感覚」(11項目)、「課題・目的の存在」(7項目)、「被信頼・受容感」(6項目)、「劣等感の無さ」(6項目)の下位尺度から構成されている。「居心地の良さの感覚」は大学で自分の居場所や馴染んでいるといった感覚、「課題・目的の存在」は大学で自分が取り組む課題や目的を持てることからの充実感、「被信頼・受容感」は周囲から信頼され、受け入れられているといった感覚、「劣等感の無さ」は周囲の関係から生じる劣等感が無い状態の項目から構成されている。回答形式は、1(全くあてはまらない)から5(非常にあてはまる)までの5件法である。本尺度は、大久保(2005)によって信頼性と妥当性が確認されている。分析には、各下位尺度で算出した合計得点を用いた。

3. 統計処理

部活動・サークルの所属における大学への帰属意識と大学適応感との関連について検討を行うために所属の割合の分析には χ^2 検定をした。所属での大学への帰属意識と大学適応感との違いの分析には分散分析と多重比較(Bonferroni法)をした。部活動・サークルによる、大学適応感に関する大学への帰属意識の影響には相関分析と多母集団同時分析が行われた。多母集団同時分析において、仮説モデルのデータに対するあてはまりの良さを判断する適合度指標として、GFI(Goodness Fit Index), CFI(Comparative Fit Index)およびRMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)を用いた。本研究におけるモデルの採択の基準は、GFIとCFIは0.90以上、RMSEAは0.08以下を基準の一つとした。AICは値が低いモデルを採択する基準とした。 χ^2 検定、分散分析、相関分析には、SPSS(Ver.

19.0)が用いられ、共分散構造分析にはAmos(Ver.19.0)が使用された。なお、有意水準は5%とした。

結 果

1. 部活動・サークルの所属の分類

対象者の1538名(90%)が部活動・サークルに所属しており、180名(10%)が無所属であった。対象者が所属している部活動・サークルの所属を運動系の部活動とサークルおよび文化系の部活動とサークルに分類した。複数の部活動・サークルに所属している学生は複数所属として分類した。その結果、運動系は692名、文化系は625名、複数所属は221名であった(表1)。部活動・サークルの所属と性との関連について検討するために χ^2 検定を行った結果、有意な差が確かめられた($\chi^2_{(3)}=37.51, p<.05$)。有意な差が確かめられたために残差分析を行った結果、男子は女子に比べて、運動系への所属の割合が高く、女子は男子に比べて、文化系への所属が高いことが確かめられた。

表1 性別と部活動・サークル所属とのクロス集計

		運動系	文化系	複数所属	無所属	合計	$\chi^2(3)$
男子	n(%)	517(43)	377(32)	164(14)	133(11)	1191	37.51*
	調整後の残差	3.98*	-6.12*	1.69	1.40		
女子	n(%)	175(33)	248(47)	57(11)	47(9)	527	
	調整後の残差	-3.98*	6.12*	-1.69	-1.40		
合計	n(%)	692(40)	625(36)	221(13)	180(10)	1718	

* $p<.05$

2. 部活動・サークルの所属における大学への帰属意識について

部活動・サークルの所属によって、大学への帰属意識が異なるかを検討するために大学への帰属意識尺度の各下位尺度得点を従属変数、部活動・サークルの所属(運動系・文化系・複数所属・無所属)を独立変数とした一要因分散分析を行った(表2)。その結果、愛着($F(3, 1714)=11.18, p<.05$)、内在化($F(3, 1714)=8.17, p<.05$)、ブランド($F(3, 1714)=5.02, p<.05$)、規範・世間体($F(3, 1714)=4.32, p<.05$)の全てにおいて有意な差が認められた。愛着、内在化および規範・世間体において、運動系、文化系と複数所属は無所属に比べて得点が高値を示した($p<.05$)。また、ブランドでは運動系が文化系と無所属より得点が高いことが示された($p<.05$)。

表2 部活動・サークル所属と大学への帰属意識尺度

	運動系		文化系		複数所属		無所属		所属(3,1714)	その後の検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
愛着	32.37	5.45	32.65	5.43	33.10	5.24	30.18	6.52	11.18*	4<1,2,3
内在化	25.58	6.50	24.90	6.63	25.43	6.17	22.91	7.19	8.17*	4<1,2,3
ブランド	15.94	3.44	15.37	3.67	15.53	3.65	14.93	3.78	5.02*	2,4<1
規範・世間体	16.29	4.52	16.06	4.79	16.49	4.50	14.98	5.31	4.32*	4<1,2,3

* $p<.05$ 1：運動系, 2：文化系, 3：複数所属, 4：無所属

3. 部活動・サークルの所属における大学適応感について

部活動・サークルの所属によって、大学適応感が異なるかを検討するために各下位尺度得点を従属変数、部活動・サークルの所属（運動系・文化系・複数所属・無所属）を独立変数とした一要因分散分析を行った(表3)。その結果、居心地の良さの感覚($F(3, 1714) = 19.26, p<.05$)、課題・目的の存在($F(3, 1714) = 14.96, p<.05$) および被信頼・受容感($F(3, 1714) = 19.89, p<.05$)において有意な差が認められた。居心地の良さの感覚において、運動系、文化系と複数所属は無所属に比べて得点が高く、運動系は文化系より得点が高いことが示された($p<.05$)。課題・目的の存在において、運動系、文化系と複数所属は無所属に比べて高い得点を示した($p<.05$)。被信頼・受容感において、運動系と複数所属は文化系と無所属に比べて得点が高く、文化系は無所属より高い得点を示した($p<.05$)。

4. 大学への帰属意識と大学適応感との関連

大学への帰属意識と大学適応感との相関係数を表4に示した。尺度間の相関係数をみると愛着は、大学適応感の全ての下位尺度との間に有意な正の相関($r=.18 \sim .63, p<.05$)を示した。内在化と大学適応感の全ての下位尺度との間に有意な正の相関($r=.06 \sim .47, p<.05$)を示した。ブランドは大学の劣等感の無さ($r=.04, ns$)を除いて大学適応感と有意な正の相関($r=.37 \sim .41, p<.05$)を示した。規範・世間体は劣等感の無さとのみ負の相関($r=-.13, p<.05$)を示し、残りの大学適応感における下位尺度と有意な正の関係($r=.12 \sim .17, p<.05$)を示した。

次に、部活動・サークル所属が大学への帰属意識と大学適応感とどのような関連があるのか検討を行うために、多母集団同時分析を用いて検討を行った。なお、ここでの仮説モデルは、大学への帰属意識が独立変数で、大学適応感が従属変数となるものである。まず、部活動・サークル所属別で仮説モデルの検討を行い、適合度指標を求めた。運動系の適合度指標は、

表3 部活動・サークル所属と大学適応感尺度

	運動系		文化系		複数所属		無所属		所属(3,1714)	その後の検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
居心地の良さの感覚	40.85	6.88	39.40	6.95	40.58	6.61	36.51	9.00	19.36*	2<1; 4<1, 2, 3
課題・目的の存在	27.05	4.27	26.96	4.18	27.27	4.47	24.73	5.61	14.96*	4<1, 2, 3
被信頼・受容感	19.57	4.10	18.74	4.31	19.81	3.89	17.10	4.64	19.89*	4<2<1, 3
劣等感の無さ	19.24	4.04	19.00	3.82	18.84	3.75	19.58	4.15	1.58	

* $p<.05$ 1：運動系, 2：文化系, 3：複数所属, 4：無所属

表4 大学への帰属意識と大学適応感との相関

	内在化	ブランド	規範・世間体	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	被信頼・受容感	劣等感の無さ
愛着	.70*	.58*	.32*	.62*	.63*	.51*	.18*
内在化	—	.77*	.49*	.40*	.42*	.47*	.06*
ブランド		—	.50*	.37*	.38*	.41*	.04
規範・世間体			—	.12*	.14*	.17*	-.13*
居心地の良さの感覚				—	.74*	.71*	.26*
課題・目的の存在					—	.58*	.24*
被信頼・受容感						—	.19*

* $p<.05$

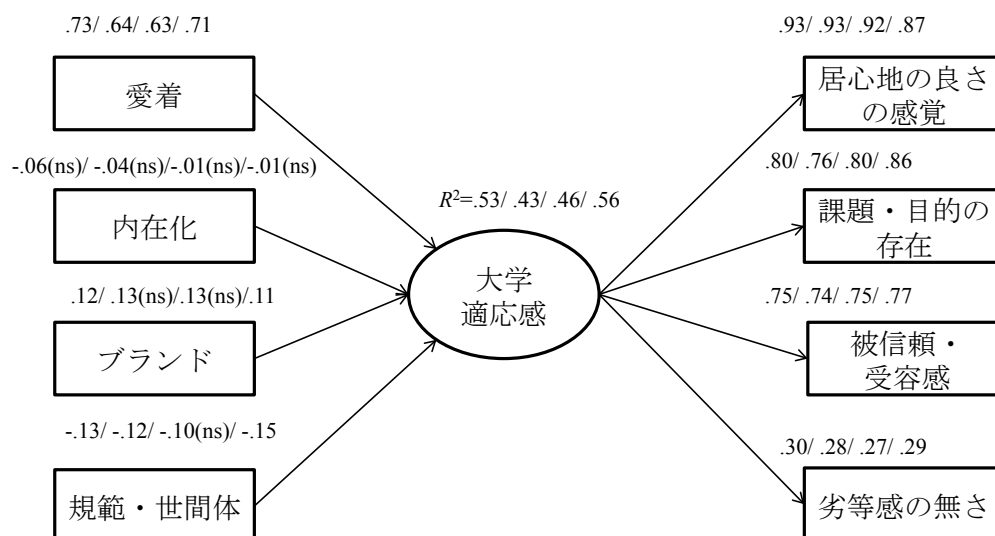
GFI=.967, CFI=.972, RMSEA=.091, 文化系は, GFI=.964, CFI=.963, RMSEA=.098, 複数所属は, GFI=.960, CFI=.970, RMSEA=.091で, 無所属は, GFI=.927, CFI=.952, RMSEA=.137であった。GFIとCFIは, 各所属において基準を満たす値を示した。RMSEAは, 全ての所属が基準の値を超えていたが, 同時分析を行うことで適合度が向上する場合もあるため(豊田, 2007), 分析を進めた。次に, 集団間で仮説モデルは同一であるが, パス係数, 共分散, 分散が異なるという配置不変性を検討した。その結果, GFI=.961, CFI=.966, RMSEA=.005, AIC=468.349を示し, 各適合度指標は基準を満たす値を示した。このことから, 仮説モデルの配置不変性が確認された。配置不変性が確認されたため, 所属間での差がみられるパス係数, 共分散, 分散に等値制約を課したモデルと, 等値制約を課さないモデルでの適合度指標を比較した。なお, 等値制約を課さないモデルは配置不変性を検討したモデルになる。これらのモデル比較によって, 仮説モデルの異質性と同質性を評価することが可能となる。分析の結果, 等値制約を課したモデルの適合度指標は, GFI=.946, CFI=.956, RMSEA=.047を示し, AICは515.105であった。等値制約を課さないモデルは等値制約を課すモデルに比べて, 各適合度指標は良く, AICは小さい値を示した。このことから, 仮説モデルにおいて群間の異質性を考慮することが妥当とし, 等値制約を課さないモデルを採択した(図1)。図1に示すパス上の数値

は, 標準化推定値である。数値は左から運動系, 文化系, 複数所属, 無所属を示した。なお, 誤差変数, 攪乱変数および大学への帰属意識の下位尺度間の共分散は省略した。運動系において, 大学適応感に対して愛着($\beta=.73, p<.05$)とブランド($\beta=.12, p<.05$)が正の影響を及ぼし, 規範・世間体が負の影響($\beta=-.13, p<.05$)を及ぼしており, R^2 は.53であった。文化系において, 大学適応感に対して愛着が正の影響($\beta=.64, p<.05$)を及ぼし, 規範・世間体が負の影響($\beta=-.12, p<.05$)を与えており, R^2 は.43を示した。複数所属において, 愛着が大学適応感に正の影響($\beta=.63, p<.05$)を及ぼしており, R^2 は.46であることが確かめられた。無所属において, 大学適応感に対して愛着($\beta=.71, p<.05$)とブランド($\beta=.11, p<.05$)が正の影響を示し, 規範・世間体が負の影響($\beta=-.15, p<.05$)を及ぼしており, R^2 は.56であることが明らかにされた。

考察

1. 部活動・サークルへの所属の割合について

9割の大学生は部活・サークルに所属しており, その内, 男子大学生の4割と女子大学生の3割は運動系の部活動・サークルに所属していた。また, 男子大学生の3割と女子大学生の4割は文化系に所属しており, それぞれ1割の大学生は複数の部活動・サークルに所属していた。運動系では男子大学生は女子大学生より所属する割合が多く, 反対に文化系において女子



†パス上の数値はすべて標準化推定値を示す
 ††数値は左から運動系, 文化系, 複数所属, 無所属を示す
 †††パス係数は $p<.05$ を示す
 ††††誤差変数, 攪乱変数および帰属意識の下位尺度間の共分散は省略した

図1 大学への帰属意識と大学適応感との関連の分析

大学生は男子大学生より割合は高かった。本結果は、迫・荒井（2002）で報告されていた所属の割合と近値したが、平井ほか（2012）とは異なる傾向を示していた。Busseri et al. (2011) は、大学での活動の機会は大学の規模と強い正の関係にあることを報告している。つまり、本研究の対象とした大学は複数のキャンパスを有し学生数も多いため、活動場所と活動の種類が多くなったため、先行研究と異なる結果を示したことが推察される。しかしながら、本研究は1つの大学のみを対象としており、先行研究では複数の大学を対象に検討を行っている。今後は、複数の大学を対象に、大学の規模を考慮して部活動・サークルの所属に関する検討を行っていく必要がある。

2. 部活動・サークルの所属と大学への帰属意識および大学適応感の関係について

本研究の第1の目的は、運動系、文化系、複数所属、無所属に分類して、部活動・サークルの所属が大学への帰属意識と大学適応感とどのような関係にあるのかについて検討することであった。

大学帰属における愛着、内在化と規範・世間体および大学適応感における居心地の良さの感覚、課題・目的的存在と被信頼・受容感では、部活動・サークルに所属している学生は所属していない学生に比べて得点が高くなることが示された。また、ブランドにおいて運動系の学生は無所属の学生に比べて得点が有意に高かった。先行研究では、部活動が大学への帰属意識（浅井，2011）と学校適応（村松・日下部，2014；岡田，2009；渡辺・大重，2010）と肯定的な関係にあり、部活動を含めた課外活動が大学適応（Busseri et al, 2011）を促すことが示されているが、本研究でも部活動・サークルに所属している大学生の得点が高くなるという結果が得られた。部活動・サークルには、大学生の大学生活の範囲を広げ、その活動を通して目標の達成や、他者との交流が育まれるという機能を有していることが考えられる。このことから、部活動・サークルに所属している大学生は大学への帰属意識を有しているだけではなく、大学適応感も高いことから、大学生にとって部活動・サークルが大学生活に重要な機能を果たしていることが推察される。しかしながら、本研究は1時点における部活動・サークルと大学への帰属意識と大学適応感との関係について検討したものであり、部活動・サークルが大学への帰属意識と大学適応感に及ぼす影響を明らかにしたものではない。今後は、2時点以上の大学への帰属意識と大学適応感の

縦断的な検討が必要になる。

ブランド、居心地の良さの感覚と被信頼・受容感において、所属先の違いによって得点が異なることが確かめられた。特に、運動系の部活動・サークルは文化系に比べて、大学への帰属意識と大学適応感が育まれやすい場である可能性が考えられる。岡田（2009）は、部活動へのコミットメントによって、部活動が学校生活に果たす機能に違いがあることを指摘している。また、Busseri et al (2011) は、大学適応には活動の頻度が重要になることを明らかにしている。つまり、運動系の部活動・サークルは、活動に対する積極性が高く、他者との交流が豊富にあることが考えられる。しかしながら、本研究では部活動・サークルにおける所属のみで検討を行っており、その所属先でのコミットメント、活動頻度と対人関係に関する検討はなされていない。今後は、所属先へのコミットメント、活動頻度と対人関係を考慮して、部活動・サークルと大学への帰属意識および大学適応感との関係について検討していくことが重要になると考えられる。

本研究の第2の目的は、部活動・サークルの所属によって、大学への帰属意識が大学適応感に及ぼす影響がどのように異なるかを検討することであった。分析の結果、愛着に関しては、全ての学生において大学適応感へ有意な正の影響を及ぼしていた。中村・松田（2013）は、重回帰分析を行い愛着のみが大学不適応と大学満足に対して有意な影響を及ぼしていることを報告している。また、愛着が大学不適応を抑制すること（中村・松田，2014，2015）や充実感を促進すること（高木，2006，2007）が明らかにされている。このことから、部活動・サークルの所属に関わらず、大学に対する好意的な帰属意識である愛着を感じるによって、大学での居場所や周囲の人から信頼されているといった大学適応感を高めることが推察される。

しかしながら、部活動・サークルの所属によって、ブランドと規範・世間体から大学適応感への有意な規定力が異なることが確かめられた。運動系と無所属において、ブランドから学校適応感に正の規定力を及ぼしていた。ブランドが大学満足と就学意欲との間に正の相関があり、大学不適応と負の相関関係にあることが報告されている（中村・松田，2013）。帰属意識を促す要因は、目標の達成、多集団との比較や他者との交流とされている（浅井，2011）。つまり、運動系の部活動・サークルに所属する学生は、活動を通してこのような経験を得ることによって、大学での恩恵を感じるによって大学適応感を促していることが考え

られる。また、高木 (2011) は、重要な所属先として大学を挙げる学生において、大学への帰属意識が充実感を規定することを報告している。無所属の学生は、部活動・サークルに所属していないため、大学を自身にとって重要な場所として捉えている可能性が高いと考えられる。このことから、無所属の学生は、大学に所属することで得られる恩恵を感じるによって、大学適応感を促進した可能性が推察される。しかし、本研究では、大学に対する重要度の認知に関する調査は行っていないため、無所属の学生が大学をどの程度重要と捉えているかは不明である。今後は、大学に対する重要度の認知を含めて、無所属の学生に対する帰属意識と大学適応感との関連を検討する必要があると考えられる。

規範・世間体においては、運動系、文化系と無所属では規範・世間体が大学適応感に負の影響を及ぼすことが確かめられた。松山 (2010) は、従業員の会社に対する義務感や世間体を気にするから辞められないといった帰属意識が心の健康を抑制してしまうことを明らかにしている。このことについて、松山 (2010) は、「自己を支配するしかるべき本来の自我とは異なる何かはその自己を支配するとき、その自己の精神的健康を損なわれる」と述べており、本来の自我とは異なる自己として義務意識や世間体が含まれるとしている。このことから、運動系、文化系と無所属の学生において、大学に所属しているのは規範・世間体を気にするといった消極的な帰属意識を有することが、大学での居心地の良さや周囲の人から受けいれられているといった大学適応感を抑制することが推察される。この時、複数所属の学生において、有意な規定力は確かめられなかった。本研究では、複数の部活動・サークルに所属している学生を1つにまとめているが、中でも運動系に対して重要度やコミットメントが高い学生も存在し、文化系に対して重要と捉えて積極的に活動する学生も存在している。そのため、複数所属は部活動・サークルの影響が複雑になり、規範・世間体から学校適応感への有意な規定力が示されなかったと考えられる。これまでの研究では複数所属の学生を除いて検討されており (平井ほか, 2012)、今後は複数の部活動・サークルの所属している学生の心理的特性や部活動・サークルに対する重要度やコミットメントについて検討していく必要があると考えられる。

以上のことから、部活動・サークルの所属の違いによって大学への帰属意識と大学適応感との関連に有意な関連が確かめられた。これは、部活動・サークルの

所属が調整変数として、これらの関連に機能していることが考えられる。しかしながら、本研究では、部活動・サークルの所属に関して4つに分類し検討してきたが、それに対するコミットメント、活動頻度や対人関係の面から検討はされていない。今後は、これらの観点を含めて検討することによって、部活動・サークルが大学生活に果たす機能が明確になると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究は、部活動・サークルの所属における大学への帰属意識と大学適応感との関連について検討を行った。その結果、9割の大学生は部活動・サークルに所属していた。また、部活動・サークルに所属している大学生は所属していない大学生に比べて、大学への帰属意識と大学適応感が有意に高いことが確かめられた。さらに、多母集団同時分析を用いて、部活動・サークルの所属が大学への帰属意識と大学適応感との関連に及ぼす影響について検討した結果、この関連は所属の有無や所属先によって異なることが示された。このことから、大学生の大学への帰属意識と大学適応感を促す要因として部活動・サークルの所属が調整変数として機能していることが考えられる。また、部活動・サークルの所属によって大学への帰属意識と大学適応感が異なることが示されたが、明確な因果関係までを示すことには至っていない。今後は、縦断研究を通して部活動・サークルの所属が大学への帰属意識と大学適応感にどのような影響を及ぼすかを検討していく必要がある。さらに、本研究では部活動・サークルの所属の有無のみで検討しており、その所属に対するコミットメント、活動頻度や対人関係について検討がなされていない。今後は、大学生が部活動・サークルでどのような状況にあるかを検討していくことが重要である。

引用文献

- 浅井亜紀子. 大学の帰属意識に影響を与える諸要因とジャーゴンの役割 — 社会的アイデンティティ理論の有効性 — . 桜美林論考言語文化研究, 2: 67-82, 2011.
- Baumeister, R. F. and Leary, M. R., The need to belong: desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117: 497-529, 1995.
- ベネッセ教育総合研究所. 第2章大学生活について

- 第3節先生と友人との関係. 第2回大学生の学習・生活実態調査報告書：60-69, 2012. <http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_12.pdf>
- Busseri, M., Rose-Krasnor, S., Pancer, M., Pratt, M., Adams, G., Birnie-Lefcovitch, S., Polivy, J., & Wintre, M., A longitudinal study of breadth and intensity of activity involvement and the transition to university. *Journal of Research on Adolescence*, 21: 512-518, 2011.
- 千島雄太・水野雅之. 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響 — 文系学部の新入生を対象として — . *教育心理学研究*, 63: 228-241, 2015.
- 平井博志・木内敦詞・中村友浩・浦井良太郎. 大学期における課外活動の種類とライフスキルの関係. *大学体育学*, 9: 117-125, 2012.
- 広沢俊宗. 大学新入生の適応に関する研究(I) — 学習面での適応 — 不適応に関わる諸変数の検討 — . *関西国際大学研究紀要*, 8: 121-138, 2007.
- 松井洋・中村真・田中裕. 大学生の大学適応に関する研究. *川村学園女子大学研究紀要*, 21, 121-133, 2010.
- 松山一紀. 組織に対する帰属意識が従業員の心の健康に及ぼす影響. *商経学叢*, 56(3): 639-654, 2010.
- 松村宏馬・日下部典子. 部活動適応感が学校適応感に及ぼす影響. *福山大学こころの健康相談室紀要*, 8: 83-91, 2014.
- 室橋弘人. 分析のよさを評価する — 適合度指標概論 — , 豊田秀樹 (編), 共分散構造分析 [疑問編] — 構造方程式モデリング — . 朝倉書店, 2003, pp.122-125.
- 中村真・松田英子. 大学生の学校適応に影響する要因の検討 — 大学不適応, 大学満足, 就学意欲に着目して — . *江戸川大学紀要*, 23: 151-160, 2013.
- 中村真・松田英子. 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 — 帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能 — . *江戸川大学紀要*, 24: 13-19, 2014.
- 中村真・松田英子. 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2) — 出席率, GPAを用いた分析 — . *江戸川大学紀要*, 25: 135-144, 2015.
- 中山留美子・中西良文・長濱文与・中島誠. 初年次前期の授業での対人関係への動機づけが大学適応に及ぼす影響. *心理学研究*, 86: 170-176, 2015.
- 岡田有司. 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響 — 部活動のタイプ・積極性に注目して — . *教育心理学研究*, 57: 419-431, 2009.
- 大久保智生. 青年の学校への適応感とその規定要因 — 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 — . *教育心理学研究*, 53: 307-319, 2005.
- 大久保智生・青柳肇. 大学1年生における大学環境への適応感の変化の検討 — 大学生用適応感尺度の作成の試み(2) — . *ソーシャル・モチベーション研究*, 3: 39-45, 2004.
- 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二. 大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討 — 第1志望か否か, 合格可能性, 仲間志向に注目して — . *青年心理学研究*, 24: 125-136, 2013.
- 小塩真司. 研究事例で学ぶSPSSとAMOSによる心理・調査データ解析. 東京図書, 2005, p.267.
- 小塩真司. はじめての共分散構造分析 — Amosによるパス解析. 東京図書, 2008, pp.110-111.
- 迫俊道・荒井貞光. 大学生のクラブ・サークル活動に関する研究. *広島体育学研究*, 28: 11-20, 2002.
- Strayhorn, T. L., *College students' sense of belonging: A key to educational success for all students*. New York: Routledge, 2012, p.16.
- 須崎康臣・杉山佳生. 自己効力感および自己調整学習方略が大学生の体育適応感に及ぼす影響. *体育学研究*, 61, 91-102, 2016.
- 高木浩人. 大学生の組織帰属意識と充実感の関係. *愛知学院大学心身科学部紀要*, 2 (増刊号): 61-67, 2006.
- 高木浩人. 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 (2) — 組織による差異の検討 — . *愛知学院大学心身科学部紀要*, 3: 47-54, 2007.
- 豊田秀樹. 共分散構造分析 [Amos編] — 構造方程式モデリング — . 東京図書, 2007, p.76.
- 内田千代子. 大学における休・退学, 留年学生に関する調査 第32報. *大学メンタルヘルス研究会報告書*, 33: 42-59, 2012.
- 内田千代子. 大学は今(第18回)大学生の休学・退学・留年に関する問題① — 国立大学の調査から — . *習慣教育資料*, 1240: 28-29, 2013a.
- 内田千代子. 大学は今(第20回)大学生の休学・退学・留年に関する問題③ — 国立大学の調査から — . *習慣教育資料*, 1244: 28-29, 2013b.
- 渡辺弥生・大重啓. 中学生の部活動における顧問の

リーダーシップが学校適応に及ぼす影響について.
法政大学文学部紀要, 62:95-112, 2010.

山本嘉一郎・小野寺孝義. Amos による共分散構造分
析と解析事例. ナカニシヤ出版, 2002.